

質問形式とメディア - 国家の関 - 係

スティーブ・クレイマン

ジョン・ヘリテッジ

訳：川島理恵

1. はじめに

本稿では、ある制度的環境、すなわち米国大統領の報道会見でのジャーナリズムにおいて、話し手がどのように質問を形作るのかという問題に焦点を当てた最近の研究を統合する (Clayman and Heritage 2002b; Clayman et al. 2006; Clayman et al. 2007)。これまでの研究では主に、質問形式の変容、すなわち大統領への質問行為がどのように変化してきたか、また社会的な状況によってどう変わるのか、について検討を行ってきた。実践的な会話分析の試みとして行われ、質問形式を、ジャーナリズムという制度やジャーナリズムと国家との関係を知る1つの手だてとして扱ってきた。

ここで検討を行う変容の軸になっているものは、それぞれ違った質問のモードである。それは(1)礼儀正しさ、注意深さもしくは恭しさを示すモード、それに対して(2)精力的、攻撃的もしくは対立するようなモードの2つである。それらの違いを明確化するために、30年ほど離れた2人の大統領(ドワイト・アイゼンハワーとロナルド・レーガン)に対して、政府予算についての質問がどのように向けられているのかを考察してみよう。

(1) [Eisenhower 27 Oct 1954: 9]

- 1 JRN: Mr. President, you spoke in a speech the other night of
2 the continued reduction of government spending and tax cuts
3 to the limit that the national security will permit.
4 Can you say anything more definite at this time about
5 the prospects of future tax cuts?

記者 大統領、先日の演説で引き続き国家安全が許す限り政府財源の削減と減税を行うと話されました。減税の見通しについてより具体的なことを話してもらえますか?

(2) [Reagan 16 June 1981: 14]

- 1 JRN: Mr. President, for months you said you wouldn't modify
2 your tax cut plan, and then you did. And when the
3 business community vociferously complained, you changed
4 your plan again.
5 I just wondered whether Congress and other special
6 interest groups might get the message that if they
7 yelled and screamed loud enough, you might modify
8 your tax cut plan again?

記者 大統領、数ヶ月間減税に関する計画を変更しないとおっしゃっていましたが、されました。そして、実業家たちがしつこく訴えたときに、あなたは計画を再度変更されました。こういった経緯から米国議会とその他の利益関係にある団体は、もし十分に喧しく騒ぎ立てれば、あなたはまた減税に関するプランを変更するかもしれないといった解釈をするのではないかと、私は少し思います。

上の2つの質問は、財務関係や減税についてのことだが、アイゼンハワーに対する質問の方が、いくつかのやり方でより礼儀正しいと言える。質問のアジェンダ（目的とすること）も基本的には親切だ。アイゼンハワー自身の以前の発言によって引き起こされているように枠組み付けられているし、議論を起こすような、もしくは対立するような要素は含まれていない。また攻撃的でもない。この質問では、どういった返答が正しい、もしくは好まれるのかに関する志向は示されているが、最小限である。そのため、形式的には質問の話題に対して中立的である。最後に、この質問は注意深く間接的である。大統領が返答することを、必ずしも強要する訳ではなく、“Can you say anything...”（4行目）という形式を使うことで、大統領が答えられない可能性さえも残していると言えるだろう。

それに比べて、レーガンに対する質問は、より攻撃的である。1から4行目にあるように、この質問もまた大統領の以前の発言によって引き起こされているように組み立てられている。しかしここでジャーナリストは、大統領の発言と行動の矛盾に関して詳しく述べている。その矛盾は、大統領を弱いものとして、また特別な利益に恩恵を受けているかのように見せている。この前置きに含まれる要素は、本質的に攻撃的な質問のアジェンダを設定することになる。さらに、この攻撃的な前置きは、4から7行目に続く質問に含まれる前提の基礎となる。この後に質問が続くことによって、その前置きが真実であることが仮定され、大統領は圧力に屈しやすいという示唆がなされる。その前置きは、まったく中立的ではなく、断定的にyesという返答を選択し、それによって大統領に対して、質問によって形作られた攻撃的な見方に同調するように迫っている。

故に、これらの質問はまったくそれぞれ違ったものになっている。さらに、大統領に対して敬意を払う形から、対立的な形へと変化する異なった立場を表している。ここでの質問形式に関する研究は、相互行為それ自体というよりも、他方面に波及する可能性があると言える。この研究は、民主主義社会におけるニュースメディアで扱われる中心的問題、すなわちジャーナリズムと国家の関係を扱うのである。

こうした異なるモードは、ジャーナリズムと国家の関係を捉えると考えられてきた。ジャーナリズムのあり方のモデルとして、自立した番犬という見方や、それに反して言いなりになったり（Herman and Chomsky 1988）もしくは敵対するようになったりする（Patterson 1993）関係であるといった考えが語られてきた。ジャーナリストの行動は状況によって変化しやすいため、そういった固定したモデルではなく、ジャーナリストの勢いがどのようなときに盛り上がり、どのようなときに盛り下がるのか。それぞれ特定の状況をダイナミックな概念で捉える必要があるだろう。一体、いつジャーナリズムとしての番犬は吠えるのだろうか？ この問題を考えるためには、ジャーナリズムの攻撃性についてシステムティックに追跡する必要があり、質問形式に関する研究はその点で力を発揮できるだろう。

2. 質問分析のシステム

会話分析による先行研究に基づいて、我々の質問分析システムは、攻撃的な質問の現象を次の5つの側面に分ける。

1. 主 導 性 質問の目的が受け身ではなく進取的であるか
2. 率 直 さ 質問が扱う問題に関して慎重というよりは、率直か

3. 積極性 質問がある特定の返答を誘っているもしくは、中立的というより独断的か
4. 対立性 質問が大統領の立場に反したアジェンダを追求しているか
5. 説明責任 質問が明確に大統領に政策もしくは彼の行動を正当化させるような説明を求めているか

それぞれの側面を、質問形式の特徴から観察可能な尺度として定義し、指標として使用した。このコード化システムの簡単な記述を下に示す (Clayman and Heritage 2002b, Clayman et al. 2006)。

主導性 ジャーナリストの主導性は下記の3つの形で発揮される。

- (1) 質問の前置きにおいて、質問の文脈を形成する
- (2) 1回の発話において、1つ以上の質問をする
- (3) フォローアップの質問をする

これらのやり方は、より進取的な立場でのジャーナリズムのあり方を表す。

率直さ 率直さは、質問に対して間接的で慎重な立場を表すやり方が欠如している場合を指す。ジャーナリストの行動は、自己参照的枠組み（例えば、“I wonder whether.....” “I want/would like to ask.....” “Can I/Could I/May I ask.....” 「～かしら」「お聞きしたいのですが」「お聞きしてもよろしいですか」）を使った形で質問が開始されている場合、間接的であることが明示される。それは、そういった枠組みが、本来の質問が開始される前に話し手の意図や望みを伝えることになるからだ。また、他者参照的枠組みによっても間接的であることが表される場合もある。質問に答えることに関して、大統領の能力を喚起させるような言い方（例えば“Can you/Could you tell us.....” 「～について話す／語ることはできますか？」）や、大統領の意欲を問うような言い方（例えば“Will you/Would you tell us.....” 「～について話していただけますか？」）を使う。それらは、大統領が聞かれたことに関して話せない、もしくは話したくない可能性もあることを示している。自己または他者参照的枠組みは、質問による高圧的な意味合いを軽減している。逆に、それらの枠組みが欠如している時は、大統領に対して問題を突きつけているような現れ方になるのだ。

積極性 yes/no質問は評価されやすいため、ジャーナリズムの積極性を示すことができる。yes/no質問は、下記の2つのやり方でyesもしくはnoといったタイプの返答を誘うもしくは好むような形でデザインされている。(1) 質問の前置きの部分の発話によるもの（例えば、“Unemployment rose sharply last month. Are we in an economic downturn?” 「先月失業率が急激に上がりました。私たちは経済的な下降の中にありますか？」）もしくは(2) 質問の言語的な形式によるもの。否定的な言い表し方の質問はYesの返答に傾斜している（例えば、“Aren't we in an economic downturn?” 「経済的な下降にあるのではないのですか？」）

対立性 対立するような立場は、(1) 質問の前置きの部分のみ、もしくは(2) 質問の全体的なデザインによって示される。前置きは、それが大統領に対して同意しない、もしくは明らかに政府に対して批判的である場合に、対立的であるとコード化される。また、続い

てなされる質問が、その前置きに焦点を当てるもの（例えば、“What is your response to that?” 「それ（今私が述べたこと）に対して、どう反応されますか」）は、結果として前置きで述べられたこと自体を、真実として見なすのではなく、議論する必要があることとして扱う。前者は前置きのみが対立的であるが、後者は対立的な姿勢が、質問全体に貫かれている。

説明責任 質問が、大統領に対して彼の政策に関してあからさまに説明を求める、もしくは正当化するように求める場合に「説明責任」を求めるものとして定義される。それらの質問は、政策をその額面通りに受け入れることを拒否しているため、攻撃性の度合いは言語的な形式による所が大きい。Why did youで始まるタイプの質問は、先入観なく弁明を求める。その一方でHow could youで始まるタイプの質問は、大統領が彼自身の行動を適切に防御できるかどうかについて不信や懐疑心を露にするため、非難めいて聞こえる。

表1は、質問形式の分析システムについてまとめたものである。複数の項目がある指標には、より攻撃的なやり方や複数のやり方が行われた場合に高い値が適用されるように、混合の指標もしくは尺度を作成した (Clayman et al. 2006)。順序変数として扱うこれらの尺度は、妥当だろうか？ 比例オッズ性の仮説検定では、それぞれの尺度で、一貫して単

表1 質問分析システム

指標	項目(指標)	記述	それぞれの項目に与えられた値	項目 Kappa	スコアリング	項目 Kappa
主導性	文言の前置き	質問の前になにかしらの記述がある	0 前置きなし 1 前置きあり	.93	1 3つの内2つにおいて1である場合 0 それ以外	.93
	複数の質問	一つの発話に2つ以上の質問	0 単一質問 1 複数質問	.99		
	フォローアップ質問	同じ記者によって引き続いて質問がなされた時	0 フォローアップ 質問なし 1 フォローアップ 質問あり	.71		
率直さ	他者参照の枠組みがない場合	大統領の能力や意欲を参照するような枠組み	0 枠組みなし 1 Can/Could you 「出来ますか」 2 Will/Would you 「して頂けますか」	.88	2つの項目の合計	.87
	自己参照の枠組みがない場合	記者の意図や要求を参照するような枠組み	0 枠組みなし 1 I wonder 「でしょうか」 2 I'd like to ask 「お聞きしたいのですが」 3 Can/May I ask 「お聞きしていいですか」	.91		
積極性	前置きにおける返答への傾斜	前置きがyesかnoを愛好する	0 傾斜なし 1 無害な傾斜 2 好意的でない傾斜	.67	2つの項目の合計	.80
	否定形の質問	Isn't it...? 「ではないのですか？」 Couldn't you...? 「できないのですか？」	0 否定形の質問なし 1 否定形の質問あり	.94		
対立性	前置きにおける対立性が示された時	質問の前置きが対抗する場合	0 対立性の前置きなし 1 質問に焦点をおいた対立性の前置き 2 対立性の前置きが前提とされた場合	.79	2つの項目の合計	.78
	包括的な対立性	質問全体として対立性が示された場合	0 全体としての対立性なし 1 全体としての対立性あり	.66		
説明責任	説明責任を追求する質問	行政の方針について説明を求める質問	0 説明責任をもとめる質問なし 1 Why did you 2 How could you	.76	単一項目	76

独の構成概念が、順序測定可能であることが裏付けられた ($p < 0.05$)。会話分析での先行研究により、この構成概念が攻撃性の側面を持つことは妥当であるとされている。質問形式の本質的な特徴を表す項目は、相互行為者自身によって攻撃的なものとして扱われている (Clayman and Heritage 2002a)。こういった指標は、構成概念としても、また攻撃性それ自体の指標としても妥当である。

ほとんどの項目は、質問デザインの比較的形式的な側面であるため、質問の分析システムは、信頼性があると言えるだろう。コード化は2名組の14名のチームによってなされた。発話形式を指標としてコーディングしていく決定は、2人の同意によってなされ、何かしら疑いのあるケースは、チーム全体で話し合い決定した。10の記者会見からなるサブサンプルを再度コード化した結果、4つの尺度の内3つにおいて、.80以上のKappa統計量、残りの1つはこの水準に少し足りない.78という結果となった。一般的に、.75以上のKappa統計量は、90%以上の一致係数を示すと考えられるため (より高いコード指標の一致係数についてはベイクマンほか (Bakeman et al. 1997) を参照)、このシステムは明らかに信頼性があると考えられる。

3. データ

この研究では、アイゼンハワーからクリントン (1953-2000) までの政府を包含する。この期間は、公開の記者会見の時代といえる。 *Public Papers of the Presidents of the United States* から得たトランスクリプトを使用し、1953年から2000年までの各年で4つの記者会見を抽出した。時間との関係を計る検定力を最大にするため、1年の内各3ヶ月から1つずつの記者会見を (合計4件/年) 抽出した。ホワイトハウス以外で行われた記者会見や大統領以外の閣僚を含む記者会見は、このサンプルから除外された。結果、164の記者会見とその中の4,608の質問からなるデータベースが生成された。

4. 歴史的傾向

5つ全ての攻撃性を示す指標が、サンプル抽出をおこなった期間において現れた。順序ロジスティック回帰モデルにおいて、上昇傾向は全て統計的に有為であった ($p < 0.05$)。全ての傾向において、ジャーナリズムが大統領に対して敬意をはらう態度は長期的に減少し、より攻撃的な態度の上昇が見られた。

しかし、傾向グラフが示すように、こうした一般化は、総計レベルでの攻撃性の点や趨勢の点における重要な問題をやり過ぎしてしまう。図1～5は、攻撃性を示す形式の質問の割合を4年ごとに示している。複数の線グラフにおける線は、「積み重ねられている」、もしくは累積されている。それぞれの線は、攻撃性の度合いによる質問の割合を示している。

総計レベルでの攻撃性に関して言えば、最も物議をかもしだすような時期であってもほとんどの質問は、攻撃的ではない。ほとんどの質問の特徴である率直さ以外の指標は、かなり低いレベルで最高値を示している (主導性35%、積極性15%、対立性18%、説明責任6%)。

趨勢の形に関して言えば、率直さのパターンは (図2a) 他の指標よりも緩やかでかつ単一方向の変化が見られる。サンプル抽出をおこなったほとんどの期間において (1番古い年と最新の年を除いて) 直接的な質問 (図2a) は単調に上昇している。その一方で間接的

な質問（図2b）は単調に減少傾向にある。このように1950年代のジャーナリストは（“Would you care to tell us...” “Can I ask whether...” 「～についてお話いただけますか」 「お聞きしたいのですが」といった形式を使い）注意深く質問していたが、大統領に対してより率直に問題を提示するようになった。

それに比べて、他の指標は、——主導性（図1）、積極性（図3）、対立性（図4）、説明責任（図5）——歴史的により変動しやすく、特定の歴史的な時期に集中して上昇したり下降したりしている。さらに、その4つの指標を通じて、上下するパターンはかなりの相関関係にある。そこでは、攻撃的な質問の移り変わりにおいて4つの段階を見て取ることができる。

第1の段階はアイゼンハワー政府からジョンソン政府に渡ってみられた（1953-1968）。この時期には、4つ全ての攻撃性の指標がいくつかの変動があるが、比較的低く状態にあった。

第2の段階は、ニクソンからレーガンの第1期である（1969-1984）。16年に渡るこの期間では、攻撃性を示す指標が継続的に上昇した。この上昇傾向における唯一の例外はカーター政府の時に起こった。カーター大統領に対する質問は、対立傾向にないものが多かったが、他の指標では攻撃性が見受けられた。

第3の段階は、レーガンの第2期から始まりブッシュ政府まで続く（1985-1992）。この時期では、攻撃的な質問が基本的に減少傾向にあったが、ニクソン政府以前の段階より下降することはなかった。

第4であり最後の段階は、2期に渡るクリントン政府で、この時期では攻撃性は再度上昇した。対立性はレーガン政府の第1期に見られたピーク以上を超えた。

図1 主導性

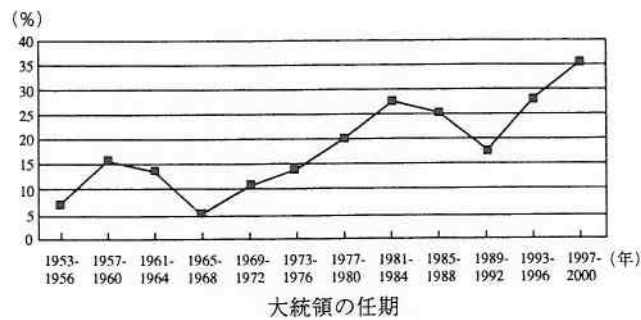


図2a 率直さ

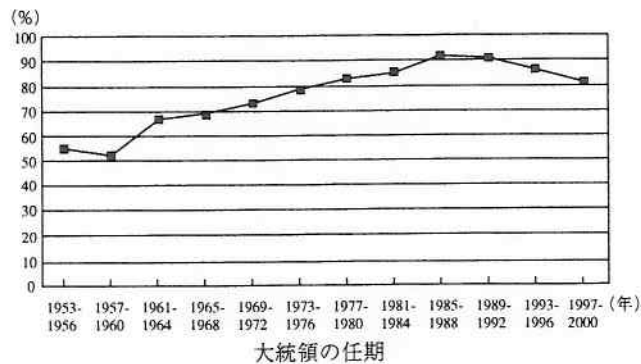


図 2b 間接性

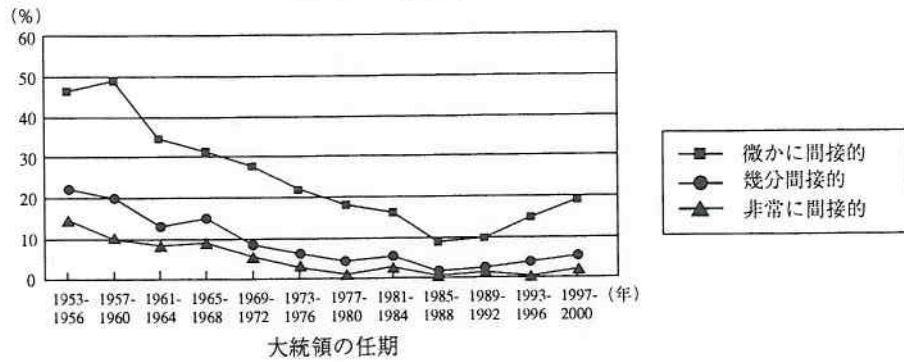


図 3 積極性

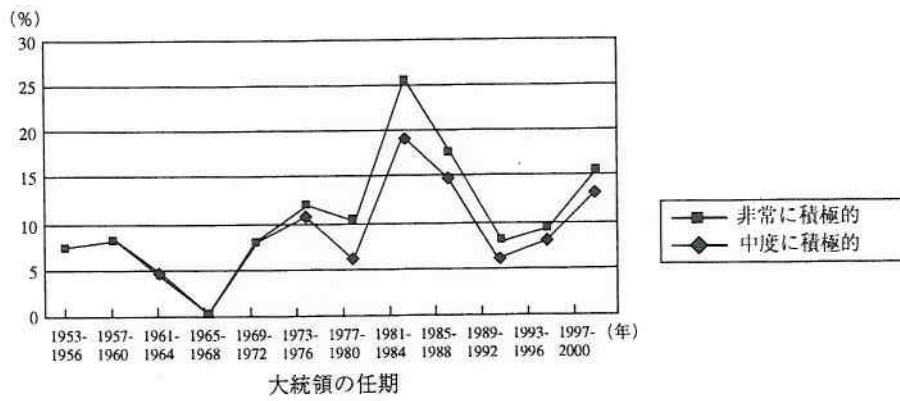


図 4 対立性

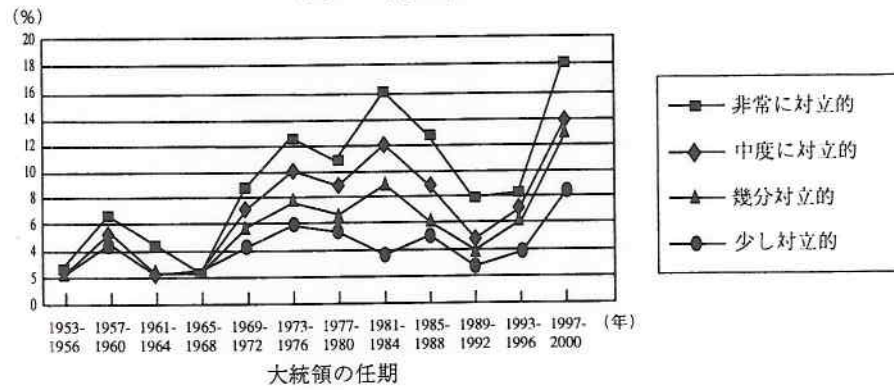
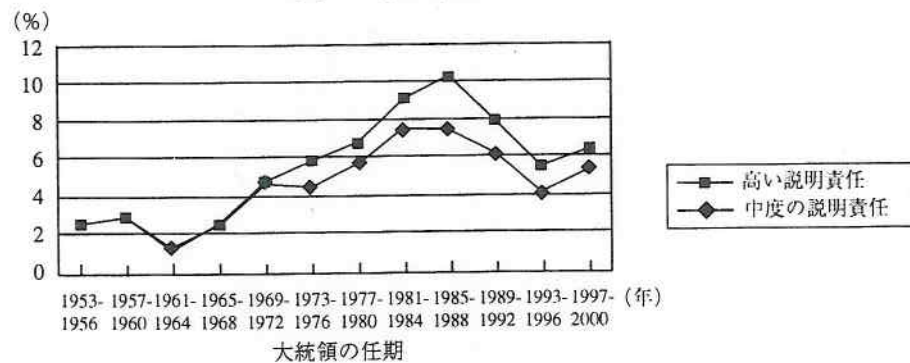


図 5 説明責任



5. 攻撃性の予測変数

これらの傾向を、左右するものはなんだろうか。概して、質問のデザインに現れるように、ジャーナリストは、どういった社会的状況に反応しているのだろうか。この問題に取り組むために、様々な社会状況の指標を予測変数として順序ロジスティック回帰分析を行った。表2は、検討した社会状況とその指標をまとめたものである。表3は検討をおこなったモデルである。全ての結果で有為でなかった要因は、後のモデルでは省かれた。表4は最終的なモデル（表3の12）から得た結果を示している。

表2 独立変数

条件	独立変数
各政府のライフサイクル	最初の記者会見と第1期中後半の記者会見の比較
	第1期の段階的傾向
	第1期と第2期の比較
	前回の記者会見からの経過時間
大統領の任期	ギャロップにおける支持率
経済状態	失業率
	消費者物価指数
	短期貸付金利
	ダウ・ジョーンズ
外交関係	内政に関する質問と外交・軍事に関する質問
	外交関係と時間の相互作用
	外交関係と短期貸付金利の相互作用
	外交関係と失業率の相互作用
歴史的傾向	年度
	年度の平方

表3 回帰モデル

モデルセット	独立変数
1 (基礎モデル)	年度, 年度の平方 ^a
2	モデルセット1+前回の記者会見からの時間
3	モデルセット1+初回記者会見指標 ^b
4	モデルセット1+在政府時間 ^b
5	モデルセット1+第2期指標
6	モデルセット5+失業率
7	モデルセット5+短期貸付金利
8	モデルセット5+消費者物価指数
9	モデルセット5+ダウ・ジョーンズ平均
10	モデルセット5+失業率, 短期貸付金利
11	モデルセット10+ギャロップ
12	モデルセット10+外交指標
13	モデルセット12+外交指標×時間
14	モデルセット12+外交指標×失業率, 外交指標×短期貸付金利

^a 率直さと説明責任の結果のみが2次の項においても保持された。 ^b 第1期のみ

表4 攻撃的な質問の予測因子

条件	予測変数	結果				
		主導性	率直さ	積極性	対立性	説明責任
各政府のライフサイクル	第2期 オッズ比 p 値	より主導的 1.79*** <.001	やや直接的でない .82* .0191	より積極的 2.04*** <.001	より対立的 1.68*** <.001	説明を強く求める 1.44* .028
経済状態	失業率 オッズ比 p 値	より主導的 1.15*** <.001	— 1.05 .082	より積極的 1.17*** <.001	より対立的 1.22*** <.001	説明を強く求める 1.12* .024
	短期貸付金利 オッズ比 p 値	— 1.02 .97	— .98 .159	より積極的 1.06*** <.001	より対立的 1.05** .001	— .97 .264
外交関係	外交/軍事 質問 オッズ比 p 値	— .96 .428	— 1.03 .635	やや積極的でない .52*** <.001	やや対立的でない .40*** <.001	あまり説明を求めない .58*** <.001
長期的傾向	時間 オッズ比 p 値	より主導的 1.11*** <.001	より直接的 1.23*** <.001	— .99 .557	より対立的 1.08*** <.001	説明を強く求める 1.18*** <.001
	時間 平方 オッズ比 p 値	—	水平状態 .98*** <.001	—	—	水平状態 .97** .003

注1：失業率と短期貸付金利に関しては、オッズ比は標準化されている。

注2：*p<.05、 **p<.01、 ***p<.001

各政府のライフサイクル

大統領は、就任初期にメディアとの間で、いわゆるハネムーン（蜜月）といえる時期を過ごすと考えられている。それは、初期に相性のよい形で始まり、係争的な関係へと移る（Grossman and Kumar 1979; Manheim 1979; Smoller 1990）。そういった蜜月時期を検出するために、初期の記者会見と後期のものを比べたり、第1期の時系列の変化を検証したりしたが、有為な結果は得られなかった。今回のサンプルが乏しいことを考慮しても、その結果は、初期に大統領が違った形で扱われるという考えを支持するものではない。これに反して、彼らは再選出された後では明らかに違った形で扱われることが多いようだ。最初の任期よりも次の任期では、より多くの攻撃的な質問を受けていた。

大統領自身の人気

ジャーナリストは、彼ら自身を大衆の代理であると見なし、彼らに代わって質問していると考えられる。世論調査での大統領への評価がニュースで多く取り上げられることとも相まって、ジャーナリストのそういった考えは、攻撃的な質問と大統領の人気が逆の関係にあるという仮説を示唆している。しかし、ギャロップでの大統領への支持率の検証では、最小限の結果しか出なかった。支持率は、いくつかの指標と関連していたが、その影響は極めて少なく、経済指標をモデルに加えた時点で有為でなくなった。そのため、大統領の支持率とは疑似関係にあるようだ。しかし、経済状態の指標は、大統領の支持率と攻撃的な質問の両方に影響している。

経済状態

景気循環は攻撃的な質問と関係しているだろうか？ メディアの番犬としての役割や、ニューディール政策後に現れた大統領を経済状態の管理者として見なす考え方などから、経

経済循環との関係はありえるだろう。失業率と短期貸付金利の2つの指標を、経済循環のおおよその予側変数として考えた。この2つの指標は、質問の攻撃性と直接の関係を示した。特に失業率は、ほとんどの指標と強い関係を示した。ジャーナリストは経済と相対して大統領の行動を監視しているようだ。また彼らの経済に対する感受性は多様である。それはメインストリート（失業率）とウォールストリート（金利）の両方の状態を包含しているが、メインストリート経済のほうがより顕著であるようだ。

外交関係

「ラリー・アラウンド・ザ・フラッグ」（有事には愛国心で集結する）症候群と「内政は水際で終わる」という格言があるが、これらの考えが攻撃的質問にどのように関係しているのだろうか？ 我々のサンプルは、軍事といった外因的な事柄の影響を捉える事には十分ではない。しかし根本的な「水際」での状態を、質問の内容を調べたり、内政と外交や軍事に関する質問を区別したりすることで、検証した。やはり、外交や軍事に関する質問は、内政に関する質問に比べて、ほとんどの指標において有為な差で攻撃的ではなかった。さらなる統計的検証では、この差（外交に関する質問と比べて、内政に関する質問の方が攻撃的であるという差）は、いつの時期においても、またどのような経済状況においても、常に見受けられた。もちろん、この結果は、この差の短期間での変化の可能性を排除するものではない。しかしながら、この差が長期に安定して見受けられたことは、興味深い。というのも、ジャーナリストが一般に攻撃的な立場を取る傾向があるときは常に、外交問題に関する質問にもその攻撃性が見られることを示唆しているからだ。ジャーナリストにとって、内政は水際で終わらず、計測可能な形で抑制されていると言えるだろう。

6. 結論

この研究以前は、大統領記者会見でのメディアの行動についての量的研究はほとんどなく、多変量解析はまったく存在しなかった。政治コミュニケーションに関する研究では、ジャーナリストの敬意を示す態度と攻撃性は、あまりにも捕らえ所がなく、システムティックに計測不可能であると考えられていた（Smith 1990）。もちろん、具体的な実際の行為が理解されない限り、人間の行動のあり方は「捕らえ所がない」。会話分析は、行為のあり方がどのように立ち現れているのかを、具体的に実際に起こっている行為の流れの中で捉える事により、より確かな形で数量化し、人間の行為を根拠として様々な現象を量的に解析することを可能にしている。大統領記者会見に関するこの研究は、会話分析から得られる知見が、どのように応用可能かという一例である。この場合、会話分析は、メディアや政治コミュニケーションに関する研究における中心的ないくつかの理論的問題について議論を深めるために使われた。

本研究はアメリカに焦点を当てたが、こういった質問形式の分析は、メディアと国家が直接対峙する状況が可能な場合、それらの関係を明らかにするために、（言語的かつ語用論的な違いを考慮した上で）、他の社会にも応用可能であろう。ラテンアメリカや中央ヨーロッパやアジアなどの民主主義の台頭により、ジャーナリストの自立性の出現が多く語られてきた（Waisbord 2000）。本研究で検討を行ったように、ジャーナリストの質問デザインに焦点を当てることで、そういった政治的な変化を敏感に捉えることが可能であろう。そ

れはまた、世界中の政治コミュニケーションシステムの動向を明らかにすることにつながるのだ。

【文献】

- Bakeman, Roger, Vicenc Quera, Duncan McArthur and Byron F. Robinson, 1997, "Detecting Sequential Patterns and Determining Their Reliability with Fallible Observers," *Psychological Methods*, 2: 357-70.
- Clayman, Steven and John Heritage, 2002a, *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clayman, Steven and John Heritage, 2002b, "Questioning Presidents: Journalistic Deference and Adversarialness in the Press Conferences of U. S. Presidents Eisenhower and Reagan," *Journal of Communication*, 52(4): 749-75.
- Clayman, Steven, Marc N. Elliott, John Heritage and Laurie McDonald, 2006, "Historical Trends in Questioning Presidents 1953-2000," *Presidential Studies Quarterly*, 36: 561-83.
- Clayman, Steven, John Heritage, Marc N. Elliott and Laurie McDonald, 2007, "When Does the Watchdog Bark?: Conditions of Aggressive Questioning in Presidential News Conferences," *American Sociological Review*, 72: 23-41.
- Grossman, Michael Baruch and Martha Joynt Kumar, 1979, "The White House and the News Media: The Phases of Their Relationship," *Political Science Quarterly*, 94(1): 37-53.
- Herman, Edward S and Noam Chomsky, 1988, *Manufacturing Consent: The Political Economy of the Mass Media*, New York: Pantheon.
- Manheim, Jarol B, 1979, "The Honeymoon's Over: The News Conference and the Development of Presidential Style," *The Journal of Politics*, 41(1): 55-74.
- Patterson, Thomas, 1993, *Out of Order*, New York: Knopf.
- Smith, Carolyn, 1990, *Presidential Press Conferences: A Critical Approach*, New York: Praeger.
- Smoller, Frederic T, 1990, *The Six O'Clock Presidency*, New York: Praeger.
- Thomas, Helen, 1999, *Front Row at the White House*, New York: Scribner.
- Waisbord, Silvio, 2000, *Watchdog Journalism in South America: News, Accountability, and Democracy*, New York: Columbia University Press.

(Steven E. Clayman カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

(John Heritage カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

(KAWASHIMA Michie 日本学術振興会・埼玉大学教養学部)